

エスノメソドロジーと家族療法

——夫婦間コミュニケーションの新しい視点に向けて——

辻 村 慶 子

目 次

はじめに

- 1 エスノメソドロジーとは
- 2 なぜエスノメソドロジーなのか
- 3 夫婦間のコミュニケーションのエスノメソドロジー
的分析の意義
- 4 夫婦間のコミュニケーション分析
むすびにかえて

は じ め に

戦後、日本の近代化に伴う社会の変化の中で、核家族化など家族も多大な影響を受けてきた。そのような激しい変化の中で、問題を抱える家族も多く、援助が必要とされることもあるが、その援助の方法の一つに家族療法がある。

家族療法とは、患者やクライアントなどの個人ではなく、個人と個人をとりまく家族を治療の対象とする新しい治療法である。米国から導入され八〇年代に入って特に注目を浴びるようになった。

治療経験が積まれる中で、日本の家族にさらによく適合した家族療法の必要性も強く感じられてくるようになり、そのための研究が続けられているが、その研究は、常に科学的手法で明らかにされた事柄やこれに伴う技術や理念である科学知を追求することであった。このような科学知に対して日常知は一連の身近な知識に限られ、科学的知に劣るとされ、これまであまり研究がなされていなかった。しかし、家族を理解するうえで家族の日常知を研究することは重要なことである

と考える。なぜなら家族は科学知に方向付けられるだけでなく、日常知に方向付けられ、より多大な影響を受けていると考えられるからである。人々が知っていると思ひ込み、用い、それに大きな影響を受けている日常知についての研究がこれまで余りなされていなかったのである。

日本の家族の日常知を研究することが、アメリカで発達した家族療法を日本の家族療法に発達させ、家族によりフィットし、有効性をますます発揮できるようにするのはのではないかと考えたのである¹⁾。ここでは、この日常知を研究の対象とするエスノメソドロジーを用いて家族にアプローチしたい。

1 エスノメソドロジーとは

エスノメソドロジー²⁾という言葉は、1954年にガーフィンケルによって作られた用語である。「エスノ」「メソッド」「ロゴス」という三つの単語の合成語で、「人びとの」「方法」「研究」と考えることができる。つまり「普通の人々は、日常の生活世界をどのようにして組み立て意味付け理解しているのか」というそのやり方(方法)についての実践的な研究」だということになる³⁾。

研究の対象とされるのは、これまであまり社会学では取り扱われなかった「日常知」、人々が知っていると思ひ込み使用しているそのような事柄を研究の対象として取り扱う学問なのである。

あたりまえで当然の事とされている人々の日常を、あらためて人々がなぜ当たり前としてしているのか、そこのところから考えるのである。これは、従来の社会学では余りにも科学的説明の客観主義によってあまり光りが当たらなかった部分に光りを当てようとするものである。ありのままの姿に近い人間世界を描き出そうとする試みなのである。そのために人々の生活世界を注意深く観察し、物事を詳細に見ることによって、「相互行為場面での秩序形成のメカニズムを解明しようとする」⁴⁾と山田富秋は述べている。そして、エスノメソドロジーは、決して完結することはないし、実践によって生まれ変わっていくような研究でもある。

また「エスノメソドロジーとは、世界を〔もの〕として見る支配的な見方より

も、意味の無限の生成の場へと降り立っていくことを好んで選ぶ実践そのものではないだろうか』⁵⁾ とガーフィンケルは語っている。

「エスノメソドロロジー」にとっての知的源流の中でも最も貢献の大きいものは、現象学の E・フッサールと現象学的社会学の A・シュッツであるが、エスノメソドロロジーの日常知の定義は、A・シュッツや H・ガーフィンケルの著作から生まれたと言える。そこでこの二人がエスノメソドロロジーの日常知をどのように定義しているかをみたい。

シュッツは、日常知について、一連の身近な知識、日常生活の自然的態度、日常的思考法の三つの現象をあげている。

一連の身近な知識とは、人々の生活上の処理法、便宜的指針、世間一般が抱く類型法、決まり文句、定義などである。生活上の処理法とは、日常の諸事万端をこなしていくためのありふれた諸方法である。

また、一連の身近な知識は、世間一般が抱く類型ないし理念化を含んでいて、それは人物・事物・出来事を判断し行動を行う場合の基礎となる。個人のおかれた環境は、常に変化しており、人々は多様な日常生活に生きている。そして人々の持っている一連の身近な知識は、まとまりを欠き、部分的にはっきりしていて常にいくらかの矛盾を含んでいるものなのである⁶⁾。

日常知の第二の日常生活における人々の自然的態度とは、私達が社会的世界を一つの事実として環境として知り経験するということである。シュッツは、そこに住む人々が直面するこの社会的世界のある特徴を抽出し、それを「日常生活の自然的態度」と名付けた。この自然的態度の世界「〔日常生活の世界〕とは、我々が生まれる遙るか以前から存在し、他の人々、つまり我々の祖先たちによって秩序ある世界として経験され解釈されてきた相互主観的な世界であり、また、今、我々の経験と解釈のために問題として与えられているような世界である。』⁷⁾ 一連の身近な知識としての日常知が獲得されるのは、社会的リアリティを事実と見なすことによってであり、この日常生活の自然的態度を前提としてである。

日常知の第三の日常的思考法とは、人々が一連の身近な知識を基盤に思考する方法である。

シュッツの言葉を引用すると、

「個々人の経験の間の差異は、日常的思考が次の二つの根本的思い込みで成立していることによって克服される。①見方の互換性という思い込み：もし私が隣人と立場を交換して彼の上に立ったとしても、おそらく私は彼と同じ距離から彼が用いたと同じ類型を用いて物事を眺めるであろう—と私は思い込み、また隣人もそのように思い込むであろうと私は思い込む。②意味の適切性の体系が一致しているという思い込み：反証のないかぎり、私達の個別的な生い立ちや環境から生まれる異なった視点は、当座の目的にとっては、些細なことである—と私は思い込み、また隣人もそのように思い込むだろうと私は思い込む……（シュッツ、1962、11112）。」

これは現象学的性格において端的な特徴とされるリットのいう「視界の相互性」の概念である。シュッツはここで二つのことを指摘している。第一は、日常的思考法の使用によって相互主観性の問題が解決される。シュッツの相互主観性の問題は矛盾を含んでいた。人は社会的リアリティを自分の限られた時間的空間的な観点から経験するが、それにもかかわらずそれを私的世界としてではなく、むしろ共通に知られた世界として、経験するのである。この矛盾に対してシュッツの与えた解答が、日常的思考法という考え方の使用である。第二は、人々が社会的世界の事実性という性格を生み出し維持するために用いる日常的思考法を二つ指摘していることである⁸⁹。

以上の日常知の研究においてガーフィンケルは、彼の論文の中で次の四つの重要なことを明らかにしている。

- 1 日常知は科学知の単なる劣った形態ではなく、思考の型と基本的態度においてきわめて異なっている。
- 2 日常知は、日常的思考法と日常生活の自然的態度を含む。
- 3 日常知は、社会的相互作用「人々の交わり」の重要な部分であり、それは人々の交わりを妨げるどころか、日常的思考法を用いる事によって人々の交わりが形成されるのである。
- 4 日常的思考法の正体が何であるかは、語ってはいない。それは社会的相互

作用を分析して発見しなければならないとしている。

このように日常知は科学知とは異なったものとしてとらえられている。その関係は日常知が科学知に劣ったものといった関係ではない。人々が円滑に相互作用するためには日常知は無くしてはならないものであり、日常的思考法は分析して初めて分かる実践的理解によって分かるものとしている。

ガーフィンケルは、人々の日常の交わりの基盤に、もし科学的合理性を用いるならば、その交わりはアノミックなものとなるだろうと指摘している。この合理性を相手に尊守させようとすれば、それはまわりを円滑にするどころか面倒を起こすのである。科学的合理性を追求しようとする時このような結果を生むのは、それが日常的思考方法に根ざすのではなく、科学的思考法の生み出すリアリティに根ざしているからである。日常生活には日常的な交わりの基盤をなす独自の日常的〔意味の共有された〕思考法があり、それはまさにこの理由で、社会学的分析の対象にされるべきものである⁹⁾。

日常世界を構成し、またその事実性（その世界がすでに作り上げられてしまっていて、個人の知覚とは独立して存在しているという実感）を構築するために、日常世界にいる人は、社会学者も含めて社会の成員がすでに用いている〔意味上の作り上げ〕〔概念化や類型化〕を用いるプロセスがあるが、このプロセスをエスノメソドロジーの研究対象とするのである。そしてこのような研究をエスノメソドロジーというのである。

2 なぜエスノメソドロジーなのか

M. ウェーバーは『社会学の基礎概念』の中で、社会学を次のように定義した。「社会学とは、社会的行為を解明しつつ理解し、これによってその経過とその結果とを因果的に説明しようとする一つの科学のことを言うべきである。〔行為〕とはここでは、行為者または諸行為者がそれに主観的な意味を結びつけるとき、かつその限りでの人間行動（それが外的または内的な行いであっても、不作為または忍容であっても問題ではない）のことを言うべきである。しかし〔社会的〕

行為とは、行為者または諸行為者によって思念された意味にしたがって他者の行動に関係させられ、かつその経過においてこれに方向づけられている行為のことを言うべきである。』¹⁰⁾

これに対しシュッツは、「ウェーバーのような社会学者が〔理解〕を主観的なものと呼んでいる。彼らにとって理解の目的とは、行為の受け手や中立的な観察者に対して行為者が持つ意味をとらえることではなく、行為者が彼の行為に付与している〔意味〕をとらえることである。ここに M. ウェーバーの主観的解釈の公準の端緒が求められる。したがって社会科学が真に社会的現実を説明しようとするために、一次的構成物つまり常識的な構成要素、行為に対する行為者の主観的意味付与を理解するという立場を取るものであるのなら、社会科学という構成物である二次的な構成物もまた行為が行為者に対して持つ主観的な意見への配慮を含むものでなければならない。主観的解釈の公準は、社会的世界についてのすべての科学的説明が、社会的現実を生み出している人間の行為が持つ主観的意味への配慮を持つことができ、またある場合には持たねばならないという意味で、理解されねばならない。』¹¹⁾と言っている。シュッツは〔理解〕ということが場¹²⁾の成員によっても他者の行為を意味付けし、理解するために用いられていることを指摘するのである。つまりその場にいる成員が他者の行為をその行為者の付与する主観的な意味を理解して、それを意味ある行動として次の行動で反応するわけである。しかも場の成員は社会学者がするように、自分なりの主観的意味の諸類型というものを有しており、それでもって他者の行為を解釈する時用いるのである。「シュッツは、場の成員による理解という現象を社会学的な研究課題にするべきである」と主張したのである¹³⁾。

エスノメソドロジストは、行為は実践的なものとして理解される必要があると考え、行為は合理的、ないしは規則に従ったものだという一般的な社会学的理解とは対照的な考え方をする。ルール・規範・動機・社会的類型などは、行動や日常場面の秩序だった様子を語ったり、眺めたりする手段として、エスノメソドロジーの研究に登場するが〔行為〕の原因主体としてはみていない。したがって、社会学的因果説明における原因主体というこれらの諸要素の理論的立場は、変化

を受けることとなる¹⁴⁾。また社会学者は内側から研究するということであるが、社会をその外側の有利な立場からみる人としての研究者や理論家の理念化では、社会学にとって分析的に不適切と考える。したがってエスノメソドロジストは、研究者がその研究において観察する人々の言動と、そのような観察がもたらされる社会学理論によって記述しようとしても細部に渡って一致させることは難しいと考えているのである¹⁵⁾。

ところで心理療法において個人療法では、症状の原因を個人の精神内界にあるとみなす直線因果律思考であった。しかし家族療法では個人を孤立した存在とみなさず、個人とその環境を含めて視野に置き、生物体システム¹⁶⁾としてみる。生物体システムはフィードバック円環を持つ。そしてそれは直線的因果律より円環的因果律によってよりよく理解されると考える。従来の社会学の基礎とするウェーバーの「社会的行為を解明しつつ理解し、これによってその経過とその結果とを因果的に説明しようとする」直線因果律思考と、個人と環境との相互作用の中で起こる症状や現象としてとらえるシステムアプローチの家族療法の考え方は異なるものである。したがって家族療法では、前者を使って症状や現象を説明しようとするのは困難である。K. ライターは、「社会学者の行為モデルは日常思考法を欠いているので場を構築することができない」¹⁷⁾といている。

ダーウィンやフロイトに代表される既存の学問的見地は、人々が知っていると思い込んで使用している事柄が誤りであるという前提から出発するが、エスノメソドロジーでは、むしろ人々が知っていると思い込み使用している事柄、つまり（日常知）それ自体を分析してみる必要があると考えるところから出発する。なぜなら社会の成員がそのような知識を使用していること自体が、社会的現象を生み出しているからである¹⁸⁾。家族療法に置き換えて言うならば家族の成員が機能しない日常知を使用して相互作用していること自体が、社会学的現象、症状を生み出しているといえるのである。

今世紀最高の心理療法家といわれるミルトン・エリクソン¹⁹⁾は、フロイトの精神分析はあらゆる文化の中にある、どの年令の男女にもあてはめる宗教あるいは治療だとして信じないと言っている。しかしフロイトの精神医学や心理学への大

きな貢献を認めるが、心理療法とは一人一人違う手続きであり、最初の患者に対する心理療法は次の患者に対する心理療法にはならないのであり、治療者が自ら治療法を見出すものであってフロイトから教えられるものでない。このことをあらゆる理論的立場の弟子たちに理解して欲しいと言っている²⁰⁾。私たち一人一人、あるいは一家族一家族が違っていることを強調するのである。

家族研究で新しい視点を持ち込み、現象学的な研究で重要な業績を残した研究者がいる。R. D. レインである。彼は行動は、それにかかわる人々の行為や相互作用から離れては何の意味も持ちえないと考え、もっぱら対人関係の文脈の中で議論を展開する。彼によれば、「何が起きているのか」（過程）から「誰が何をしているのか」（実践）に至る道筋をめぐることができたとき、人々の行動を理解することが可能になるのだという²¹⁾。彼の最も重要な家族療法への理論的貢献は、この実践と過程という光りに照らしてみた分裂病の家族連鎖の研究であり、個人から対人的なものへ視点を移動し、さらに対人関係の文脈の中で議論することの重要性を示したことであった。

メハンとウッドは『エスノメソドロジーの現実』（1975年）のなかでメンバーが協働で実践しているエスノメソッドの特徴を次のように表現している。エスノメソッドは、まずメンバーが自己のいる文化をあたりまえのものとみなしている限り何も見えてこない。しかも、文化は具体的場面で協働で実践されているエスノメソッドから切り離され、もうすでにできあがってしまった「構造」や「意味」としてだけメンバーの意識に残るのである。これはまさにメンバーが文化に呪縛されている状態である。ではこの「文化の呪縛」から解放されるにはどうしたらよいだろうか。それはこの文化的リアリティとはまったく違うリアリティに入り込むことである。それによってこのリアリティから解放される最初の糸口がつかめると考えている²²⁾。この「文化の呪縛」が家族を機能できなくさせた時、家族が病的症状をだすのである。そしてこの「文化の呪縛」から解放されること、いわゆるこれまでとは違ったリアリティに家族が入るのを手助けするのが家族療法なのである。

しかしながらこの「文化の呪縛」を治療者も同じく受けているのである。治療

者が自身の文化に余りにも呪縛され過ぎると有効な治療が難しくなるであろう。

以上述べてきた理由により、この論文では家族療法に新しい視点を導入するためにエスノメソドロジーによる「会話分析」を行おうとしている。エスノメソドロジーの現在の主流も「会話分析」である。これは社会的リアリティの構築が顕在的に人々の会話の中で最も観察しやすいからである。次の項では、なぜ夫婦の「会話分析」を行うのかを述べることにする。

3 夫婦間のコミュニケーションのエスノメソドロジー的分析の意義

G. H. ミードは、コミュニケーションの発生を身振りの無意識な会話からであるとし、意識的なコミュニケーションは身振りが記号となって伝わる時発生するとしている。そして身振りから発生したコミュニケーションによって社会への適応が可能になり、身振りをする側と身振りに反応する側との相互適応の中から自我意識が発生すると考えた。つまり、身振り会話は自我を発生させると考え、自我はコミュニケーション過程において形成されるのであるとミードは言うのである²³⁾。

家族の中に生まれてくる人間にとっては、コミュニケーションの相手はもっぱら家族、特に両親である場合が多い。子供にとって多大な影響をその両親が及ぼすことは今更ここで論じる必要はないと思われるが、家族のコミュニケーションの影響を臨床家がどのように述べているか、いくつか例を上げておきたい。

日本の精神病の臨床に、コミュニケーション理論を導入した井村恒郎は、次のように述べている。「非疎通に含まれる要素、つまり異様な表情や身振り、話し方、言葉や理論性の異常さ、それらの認知しにくい〔なじみのない〕記号とコミュニケーション様式は、彼らの特異な体験とそれに対応する反応の現れであろうが、遠く深く彼らの育った幼児の家庭内コミュニケーションの型に由来していると考えうる。」²⁴⁾

社会的動物である人間にとって社会に順応するということは重要なことである

が、コミュニケーションと順応との関わりを、分裂病者を持つ家族の家族療法の草分け的存在であるリッツは、「人間の順応は、人間の思考同様コミュニケーションする能力にかかっている。」²⁵⁾と言っている。コミュニケーション能力を付けるということは、人間社会の中で生きていく力をつけることであるとして、彼はそれを重視している。そして家族が社会的交流と情緒的反応の仕方を教える最初の教師であり、この教えは形式的教育を通じてではなく、家族環境と非言語的コミュニケーションによって、伝えられるのであるとしている²⁶⁾。

家族は、夫婦ぐるみあるいは家族ぐるみの病理的状态であっても、家族の対決延期、情緒的回避、偽装、隠散などの葛藤防衛によって、ここにもやはり一種のまとまりが保たれるのである²⁷⁾。このような状態であっても家族という形態は、維持される可能性を持ち、そしてそのような状態の中で子供は育ち、両親を「意味ある他者」とするのである。

コミュニケーションと感情に注目し研究したサティアは、家族の中での感情表出の自由の重要性に特に着目して、見たり、聞いたりしたことを表現する自由や、聞き返すことの自由が人間の成長にとって占める重要性を強調した。そうして一人一人が自分を理解し、その理解の仕方を「大切な人」—意味ある他者—に伝えることができ、一人一人のかけがえのなさが家族メンバーによって認められるとき、そしてさらにこのかけがえのなさが成長のために役立てられるとき、始めて自尊感情は獲得されるのであると考えた²⁸⁾。

分裂病の家族にたいし現象学的な研究を行ったレインは、「標準的な精神医学的面接は、患者がおかれている社会的状況を明るみに出す手段ではない。認められる大きな内的外傷がなければ、そしてまた内的な心的要素と呼ばれるものがなければ、患者たちすべてが意味のない病的な過程に陥ったとして見なされることになるのである。しかしながら患者が長年生きてきた現実の状況の図を作り上げることによって、我々は患者が無意味な状況（その中にいる家族の立場からすればとにかく無意味な状況）を意味があるものにしようともがいているのが見え始める。」²⁹⁾患者が長年生きてきた現実の状況、家族の相互作用の中で見れば患者をとりまく欺瞞的状況を見ることができると書いている。

米国の **MR I**³⁰⁾ おいて、初期のころある研究者が同僚に父親と母親との間で交わされた構成的面接の一部の会話のテープを聞かせ、その両親が分裂病の子供、学業不振児、非行児を持っているかいないかを推測させたところ、正確に言い当てるが多かったのである³¹⁾。これは夫婦間のコミュニケーションが子供の問題と密接な関係があることを予測させる例であろう。

家族療法を行う場合、主訴が子供の問題であっても、夫婦の関係が変わることで主訴とされた問題に直接アプローチしなくても、改善あるいは大きな変化が現れることはよくあることである。多くの場合、夫婦が家族の核をなしているのであって、家族に対するその影響力は大きい。家族に影響を与え家族を変化させようとする時、その家族の中の最も大きな影響力に注目するのは常套手段であろう。

日本で二年間家族療法を行った C. コールマンは、論文の中で次のように書いている。家族の二人にお互いの考えや感情を直ちに分かち合うように指示しても空しい結果に終わることが多かった。また日本の家族は治療場面で家族のタテマエと個々人のホンネとの間でデリケートに作り上げられ、そこから生まれる雰囲気は、我慢し、順応し気配りをするものであった。家族は〔和〕を重んじる。問題を持つ家族においては、直接に不快感情を表現しないというルールがある。言葉をあてにするのではなく人間関係の機微を読んで真実を判断しようとする日本人。言葉より雰囲気で動く日本人。など日本家族の特徴や、雰囲気等に対する反応を実に的確に指摘している³²⁾。

そこでこのような違いを見せる日本の家族の治療には、米国製の家族療法的視点に加えて、日本の家族の特徴をとらえて、治療に役立つ視点を模索をすることが必要である。治療者や観察者のための視点や介入方法を探るため夫婦間のコミュニケーションを分析するのである。そして現象をいかに的確に説明しうるかという点で、この分析の視点の有効性を試し、治療者や観察者自身の日常知を認識することの重要性に気付く、観察する側と被観察者の視界の相互性を考えに入れながら治療効果をあげていこうとするのである。そして家族の日常知と治療者や観察者の日常知の混乱をできるだけ避けて理解できるようになることを期待する。

家族を理解するための多くの会話のなかにあったであろうエスノメソドロジー的な理解方法を一つの理解の視点として明確にすることによって、治療者チームが家族の日常知を情報として、治療に有効に利用していくことができるということに意味があると考ええる。

治療者チーム側の科学知の使用だけでない日常知の使用が、治療という社会学的現象をも生み出しているのである。この点は、治療者の養成段階で考慮すべき点であるかもしれない。ここでは先ず夫婦間のコミュニケーションを分析することで日常知の研究の重要性が少しでも明らかに出来ればと考える。

4 夫婦間のコミュニケーション分析

まずエスノメソドロジーによる会話分析にふれたい。

会話分析において会話はつぎのように定義されている。会話は、参加者が各自、話すことと聞くことを交代させることで成立する形態、あるいはそのような交代が常に可能である話の形態である。(Speier [1973: 72]) また会話は、参加者が互いに話を交換する過程である。言い換えれば、会話は次の二つの基本的原則のもとで成立している。①話すのは一度に一人ずつで②話し手の交代はくりかえされる (Schegloff & Sacks [1972: 293]) ものである³³⁾。

会話分析では、大きくカテゴリー化 (categorize)³⁴⁾ の問題と ②自然な会話の形式的な組織化装置³⁵⁾ の記述にわかれる。①カテゴリー化の問題では、日常的推論のなかで様々なカテゴリーがどのように現実の行為を支配していくのか。カテゴリーに付着する〔権力性〕は日常会話場面を通してどのように維持・強化されているのか。あるカテゴリーを中心とした規範的な知識体系がどのような形で実践的な生活場面において組織化されるのか。カテゴリー間の関係性の問題、カテゴリー形成と〔世間〕の道徳的秩序の関連性、など関心が持たれている。②自然な会話の形式的な組織化装置の記述では、会話すること自体が社会を構成していく重大な事実であると会話分析家は考え、会話自体を研究の対象として詳細に記述していくのである。それに対して従来の社会学では例えばコミュニケーション

ン論のように、すでに会話が存在するものとして分析され、会話するという行為は当たり前のことであって、会話の存在が前提にされた。そのため会話の存在自体を分析することは無かった。そこで会話分析は「会話＝行為」と考えて、会話を「自然な会話」として組織化している様々な装置を記述していき、会話自体の行為論を目指している。質問－応答の問題や、その時の質問のさまざまなドラブルの様相。会話における話題の形式や話題の展開（会話において、ある話がどのようにして始まり、展開し、終わるのか。ユーモアをユーモアとして皮肉を皮肉として、我々が理解するのはなぜかなど）の記述。会話の終結の問題。言葉にならない部分（笑い、沈黙、あいずち、うなづき、その他の身体動作など）の会話組織化に対する意味などが実際に分析される³⁶⁾。

また会話分析派の記述スタイルは、直観に頼らない分析的知性によるものとして特徴づけられる。モデル検証や、尺度による測定を極力避けた綿密な記述スタイルをとる。録音や録画されたデータを何度も観察することによって、会話の当事者たちの相互作用を顕在化させ、メンバーには不可視となっているメンバーの作業を観察することができるようにするものである³⁷⁾。

会話分析の特徴（例えば、自然な会話が連続的に起こるのを忠実に再現することや会話データを分析して並べることで、読者自身の会話データ分析の可能性をつねにオープンにしておくことなど）を十分考慮したうえで、会話の流れに潜在する文化を微妙な、そして微細なところまで書き表すことは大変難しいものである。さらに会話分析の特徴は「実践する」もののなのである³⁸⁾。

＜事例分析＞

これから取上げる事例が夫婦のコミュニケーションのエスノメソドロジー的分析の良い事例とはあまり言えないが、日本人が話す言葉（タテマエ）と心の中（ホンネ）との差を、この事例はよく示しているので、この差を明確にして会話分析をするため、特にこの事例を取上げた。問題を持つ家族においてこの傾向は強く、この状態から一歩踏み込まないと治療はうまくいかない。しかし治療においては慎重に行われなければならないアプローチでもある。真実は言葉で表現さ

れると考える西欧人の考えた技法に、言葉で真実が語られにくい日本の家族を理解する手掛かりとしようという試みである。

一事例一

家族療法の専門クリニックを訪れた夫婦の事例である³⁹⁾。結婚後一年、双方の親からは、別居して暮らしている。夫はサラリーマン、妻は専業主婦である。二人は性生活がうまく行かないことを悩んで来所している。治療の過程で、治療者は、そもそもこの二人にはこのほかにもいろいろと問題があるのだろうが、コミュニケーションがうまくいってないから話し合えずに、性の分野に戦場に移して「代理戦争」をやっているのだと考察する。さらにコミュニケーションは言語レベルだけでなく非言語レベルのコミュニケーションの相互交流のないことを治療者は観察する。

そこで二人の考えの差を言葉に出して意識化させるために「口の会話」と「心のつぶやき」が二人とも違っていることを治療者は指摘、家での会話をそれぞれに日記に書かせた。持ってこられた日記を元に二人で会話に直し、これに「心のつぶやき」()が別々に書き加えられた。そこで互いのパートナーが相手の言葉をどのように理解したのかを〔 〕に書き入れたものが次のものである。

- | | | | |
|--------------------------------|---|---|-----|
| 妻「この治療を続けて、直るのかという不安があります。」 | ① | 〔私たちは、夫婦がうまく行かないのを何とかしようとカウンセリングを受けに行ったけれど、この治療を続けても良くならないのではないかという気がする。カウンセリングを続けるのは意味がないのでないか。〕 | (1) |
| (妻 訳の分からない苦勞をするより別れたい) | ② | | |
| (夫 カウンセリングを受けようと言いつ出したのはお前だろう) | ③ | | |
| 夫「とにかく努力してみよう」 | ④ | 〔やり始めたのだからこの治療を続けて二人で何とか努力してみよう〕 | (2) |
| (夫 お前が静かにしていれば済むんだよ) | ⑤ | | |
| (妻 そちらは努力する気はあるの?) | ⑥ | | |
| 妻「あなたは私を嫌いなのですか」 | ⑦ | 〔あなたの態度は私が嫌いだという態度だ。私のことが嫌いなのか。うまくやっていく為にその態度を考えるつも | |
| (妻 嫌いなら別れましょう。別の人 | | | |

ならうまく行く、と先生もいっているし) ⑧

(夫 俺ばかり責めるな。お前の態度も考えた方がいい) ⑨

夫「先生もお互いの責任だと言っている」 ⑩

(夫 わからない女だなあ) ⑪

(妻 この問題に責任なんてあるのかしら) ⑫

第二回目の会話部分

妻「あなたは仕事ばかりね」 ⑬

(妻 仕事仕事ってゆとりのない人ね) ⑭

(夫 仕事が僕の生きがいだと言っているのに、まだ分からない) ⑮

夫「仕事で失敗したら、ぼくらの生活もないからね」 ⑯

(夫 誰が生活費を稼いでいると思っているのだ) ⑰

(妻 そんな余裕の無いことじゃ大成しないわ) ⑱

妻「もう少し、家庭も考えて」 ⑲

(妻 休みはゴルフばかり) ⑳

(夫 一緒にいると息が詰まりそうだ) ㉑

夫「できるだけそうしたいね」 ㉒

りはあるのか] (3)

「この問題は二人の責任で自分だけ責任があるわけでない。二人の責任なんだ。先生も言っていただろう。これは僕の考えだけでないのだ。第三者で専門家の先生も責任は二人だと言っている。」 (4)

「あなたはいつも仕事仕事と言っているけど他にすることはしないの？ 他になにかしようと思わないの？ もう少し仕事以外のことに興味を持ったら」 (5)

「仕事は真剣に取り組まないと失敗することだってあるんだ。片手間でできる簡単なものではないのだ。そんな大変なことなんだ仕事をするということは。生易しいことではないんだ。それを僕が頑張って働いて、この生活ができていんだ。僕の仕事が無くなったら二人の生活を維持できなくなるのだ仕事を第一に考えるべきだ。そして仕事をしている人間の考えを優先させるべきだ。その点をよく考えることだ」 (6)

「あなたは余り家庭を大切にしていらない、もう少し家庭にいて欲しい」 (7)

夫婦が何を話していたかは、①④⑦⑩⑬⑯⑲②②，で分かる。夫婦がどのように話していたかは、その「心のつぶやき」を参考に推論することでパートナーの受け取り方を(1)から(7)の〔 〕に記述を試みることができた。がしかしこの〔 〕の内容も幾とおりにか他の解釈も出来るかもしれない。この会話が生の実践の場で行われているものを観察するならもっと違った意味が含まれてくるかも知れない。そして夫婦の生活世界、さらに日常知を理解すれば、それはもっと意味を限定することができるだろう。コンテキストのなか、また言葉にならない部分で、非言語コミュニケーションからの意味の限定性で、また臨場感による記述者の感情移入でさらに主観的解釈作業を行うことが出来るのであろう。

⑦で妻は「あなたは私を嫌いなのですか」と言っている。言葉のままに「イエス」か「ノー」で答えるとしたら「イエス」と言えば二人の中は壊れてしまうし、かといって「ノー」と言うには心に忠実ではない。相手の質問に答えることができない二重拘束的な質問である。そのまえの④の夫の「とにかく努力してみよう」と言う呼び掛けにまったく反応しないで、相手の言葉の真意に疑いを持って、曖昧にしてあった領域に立ち入って、核心を付く相手の真意を尋ねている。これは相手の本心を予測したうえで「私のことを今では前のように好きではないでしょう。もう別れましょう。」と婉曲に言い回している。会話のコンテキストの中で会話を理解すると何が話されているのかと言うことになる。

以上のようにシンボルを媒介としたコミュニケーションレベルで分析することもできるし、また⑦を非シンボリックコミュニケーションレベルの観点から分析すると、妻の⑦に対して夫は責められている、言葉を変えれば攻撃されたと感じられたのである。さらに突然の話題の変換に対して、夫にはとまどい、居心地の悪さがあったであろう。ゴッフマンが言うように「狼狽している様子を見せることは、弱さ、劣等、低い地位、道徳的罪悪感、敗北、その他うらやましがられない属性の証拠だと考えられている。そしてすでに示唆した様に、狼狽は出会いを支えている円滑な伝達と受容を妨害することによって、出会いそのものを脅かす」⁴⁰⁾ものであってそのような状況から早く抜け出し感情を整えようとしたのであろう。この低められた不愉快な自己の状態の反動から夫は心の中で妻の非を責めたい気

になっている。このとき夫は狼狽した人がするように、当惑を隠し本心を見抜かれまいと視線をさけ、あるいは目線を伏せていたのかもしれないし、急にそわそわしたかもしれない。夫は面子を保ち狼狽の状態から逃れ感情を整えるために、妻の質問には答えず元的话题に戻し、自分の考えでなく第三者の意見を言っている。「いかなる文化においても、対面的な相互作用には、慌てることで必ずこわれてしまうに違いないある作用力があるようにみえる。」⁴¹⁾関係をこわしたくない夫は、ゴフマンが指摘するように、面子を侵害されそうな対面的局面に入ると、人は防衛策として自己が維持する立場と矛盾するような情報が表出されるような話題や活動をさける⁴²⁾行動を夫は取ったのである。そうして再び感情を整え、相互作用に戻ろうとしたのである。

以上のように会話を分析するためには、同じ言語コミュニティにいる対象者なら言葉を理解することは可能であるから、まず分析者が行為者の生活世界を自分のものと同じ様に扱うことができるようになるために、分析者自身の生活世界を探究して認知できるという条件を作る必要がある。そうすることで、家族療法においては分析者である治療家がこの会話分析を有効に利用していくことができると考える。

むすびにかえて

我々が自己の幸せ、あるいは家族の幸せを願うのは自然なことであろうと思う。しかしながら人が生活を営む過程には、いろんな問題が起こってくる。家族の中に問題を持つ人が出現し家族がうまく機能することができなくなることもあるだろう。そんなとき人が病気になって病院に行くように、家族にも家族の機能を回復できる、家族のための病院が必要であると考ええる。しかし現実にはそんな機関があるわけではないし、家族の機能を回復させると言うような考え方が一般化されるには、家族の機能回復ができるという事実を、日本の家族がまず経験していくことであろう。そのために家族の病院は、治療のできる信頼の置けるものにならなくてはならない。

家族療法を確立、発展させた西欧人とは違った日常知を、日本人は持っている。しかし、この日常知は、家族療法研究の対象とはまだなっていない。日本人の為の家族療法を考える場合、日本人家族の日常知を観察の対象として、家族の問題の現象を説明する作業が必要であると考ええる。

さらに治療者が自己の日常知を研究の対象として取り扱ったことはまだないであろう。文化人類学の研究者でもあったJ.ヘイリーは、訓練された参与観察者であっても自分の状況については、自分の社会的ネットワークの中にいる限りどうしても色が付いてしまっていて、適切に報告できないと言っている⁴³⁾。そこで家族の相互作用を観察室のワンウェーミラーから通して実際に観察するという方法が、家族療法では導入されるのだ。同じことが治療チームにも言えるのでないか。家族の現象を理解し説明するという治療者の行為に光りを当てるために、もう一つの観察室の役目を果たすのが、治療行為へのエスノメソドロジック的視点の導入ではないかと考える。初心の治療者の養成に、内面的な成長を促すための訓練の一つに自己覚知がある。しかしこれは自己への気づきであり、自己の心理探究であり、自己洞察である。自己の日常知への気づきを強調したい。

エリクソンは、例えば同じ意味を持つ言葉があってある人がその言葉を選んだ時、その人なりの理由があっても聞いている人間には分からない。「心理療法で、患者が話す言葉の個人的な意味について理解していないことを分かった上で、その話を聞くことです。」⁴⁴⁾と語っている。また自分が姉妹について話している時、聞いている人は聞き手の姉妹に思いを巡らせて聞いているのだとして「私たちは言葉を聞くと、自分自身の学習したものによって、反応するのです。治療者はこのことを心に止めて置くべきです。」⁴⁵⁾と言っている。エリクソンは、日常知と言う言葉は使わなかったが、「患者の話す言葉の個人的意味」と言う表現や、「言葉を聞くと自分自身の学習したものによって反応する」と言う表現などは、三つの現象を持つ日常知の考え方に一致するものであると思われる。患者自身の生活世界、思考方法、生活上の知識があるということを考慮に入れたものであったであろう。だから彼は、ひとりひとりみんな違っているのだから、それぞれにあった治療方法が考えられねばならないといったのであろう。その家族、その家族の

文化の個別性に注目をしていたのである。

家族療法にエスノメソドロロジー的視点を導入することの意義は、まだ多くの問題を残している。エスノメソドロロジーの可能性はまだまだあると思われる。この研究も始まったばかりである。日本の家族療法同様これから研究成果が積み重ねられて行くことが必要であろう。

注

- 1) 詳しくは「家族療法と日常知」として発表予定である。
- 2) THE SOCIAL SCIENCE ENCYCLOPEDIA, Routledge and Kegan 1985, p. 274.
エスノメソドロロジーの主題は日常知である。日常知というのは、三つの相互に関係ある現象からなる①社会類型おおよっぱなやり方あるいは慣習、何かをさせるのを手に入れるための格言や手段からなる手近な知識の貯え。②社会的構造感、類型、予言、因果関係、知覚の個別性、プラグマティックな依存、歴史的に与えられたものという特性を所有している対象としての世界を我々が体験することである。③日常的思考法は、知識の貯えを具体的な状況に適用し、具体的状況の特性を作り出すのに人々が使用する方法である日常知は社会的相互作用の基礎である。日常的思考法の使用によって人々は同じ意味と、同じ環境に住んでいると言うことに基礎づけられたような他者との相互観的環境は、人々によって継続的に働き掛けられている実際の遂行となて人々は解釈の持っている。
- 3) 高山眞知子「訳者あとがき」K.ライター、高山眞知子訳『エスノメソドロロジーとは何か』新曜社、1987年、p. 327.
- 4) 山田富秋「エスノメソドロロジーの理論枠組と会話分析」『社会学評論』1981年、125号、p. 64.
- 5) H. ガーフィンケル他、山田富秋他訳『エスノメソドロロジー—社会学的思考の解体』せりか書房、1987年、p. 7.
- 6) A. シュッツ、森川眞規雄他訳『現象学的社会学』紀伊國屋書店、1988年、p. 33.
- 7) 前掲書(6)、p. 28.
- 8) K.ライター、高山眞知子訳『エスノメソドロロジーとは何か』新曜社、1987年、p. 8-13.
- 9) 前掲書(8)、p. 14-16 参照。
- 10) M. ウェーバー、阿閉吉男他訳『社会学の基礎概念』恒星社厚生閣、1987年、p. 7.
- 11) 前掲書(6)、p. 296.
- 12) 「場」が意味するものは、諸行動、場とされるもの、当事者、成員の典型的動機、等々である。
- 13) 前掲書(8)、p. 221.

- 14) 前掲書(8), p. 256.
- 15) D. ミッチェル編, 下田直春訳『新社会辞典』新泉社, 1987年, p. 111.
- 16) パーンタラスフィアの「一般システム理論」から派生した下位シンテムと考えられる「一般生物体システム理論」の考えである。これは生物体のみあてはまる超理論である。一般システム理論が精神医学にも適用できるようミラーによって提唱されたものである。
- 17) 前掲書(8), p. 37.
- 18) 前掲書(8), p. 2.
- 19) アメリカ人で催眠療法と短期戦略的心理療法の世界的な第一人者といわれている。彼は今世紀最高の心理療法家といわれ、個人あるいは家族療法に大きな影響を与えた。
- 20) J. K. ゼイク編, 成瀬悟策監訳『ミルトン・エリクソンの心理療法セミナー』星和書店, 1984年, p. 161.
- 21) V. H. フォーリー, 藤縄昭他訳『家族療法—初心者のために』創元社, 1988年, p. 56.
- 22) 山田富秋著「あとがき」H. ガーフィンケル他, 山田富秋他訳『エスノメソドロジー—社会学的思考の解体』せりか書房, 1987年, p. 314.
- 23) G. H. Mead, *Mild Self Society*, The Universith of Toronto press 1965, p. 69.
- 24) 井村恒郎他「コミュニケーションの病理」『異常心理学九』みすず書房, p. 292.
- 25) T. リッツ, 鈴木浩二訳『家族と人間の順応』岩崎学術出版社, 1988年, p. 7.
- 26) 前掲書(2), p. 49.
- 27) 山根常男「序章 診断と治療の背景としての家族—家族の精神医学と社会学」『家族研究リーディングス・II 家族の診断と治療』誠信書房, 1975年, p. 16.
- 28) 佐藤悦子『家庭内コミュニケーション』勁草社, 1986年, p. 213.
- 29) R. D. Laing and A. Esterson, *Sanity Madnass and the Family*, Tavistock Publication, 1966, p. 254.
- 30) Mental Research Institute 家族療法のメッカである。
- 31) L. ホフマン, 亀口憲治訳『システムと進化』朝日出版社, 1986年, p. 108.
- 32) C. Colman, *International Family Therapy: A view from Kyoto Japan*, Family process, 1986, p. 651-663. 彼女は1984年から二年間、京都の葵橋ファミリー・クリニックで家族療法家を養成するとともに日本の家族の治療を行い、その経験を最も権威ある家族療法誌に発表したものである。
- 33) 山崎敬一他「会話の順番取りシステム—エスノメソドロジーへの招待」『言語』大修館書店, 1984年7月号, p. 86.
- 34) ガーフィンケルのコンテクスト指示活動の分析は、メンバーによる認知、判断作業のエスノグラフィという形をとったが、さらに H. サックスがこの過程に「言語カテ

ゴリー」の概念を導入し、相互行為場面をより体系的に分析可能にした。

- 35) 組織化装置については、次のものに詳しく書かれてある。前掲書(33), p. 86-94.
- 36) 前掲書(5), p. 307-308.
- 37) 前掲書(4), p. 77.
- 38) 前掲書(5), p. 307.
- 39) 平泉悦郎「しあわせ迷路地図『家族療法』のカルテから」『週刊朝日』1986年, 9月12日, p. 148, 9月19日, p. 154.
- 40) E. ゴッフマン, 広瀬英彦他 訳『儀礼としての相互行為一対面行動の社会学』法政大学出版局, 1986年, p. 99.
- 41) 前掲書(4), p. 98.
- 42) 前掲書(4), p. 12.
- 43) J. ヘイリー, 佐藤悦子訳『家族療法一問題解決の戦略と実際一』川島書店, 1985年, p. 11.
- 44) 前掲書(20), p. 236.
- 45) 前掲書(20), p. 113.